

CFTニュース&息抜き（2月）

全日本コーヒー公正取引協議会（コーヒー公取協）に寄せられた問い合わせなどを、トピック形式で毎月リリースします。参考になれば幸いです。

1. 2026年1月の気になる問合せ

- (1) 当社の製品に公正マークを付したいのですが、マークのサイズ、添付場所などのマニュアルがあればいただきたい。

⇒ 公正マークは、消費者庁長官及び公正取引委員長が認定したコーヒー公正競争規約（官報告示）を遵守した製品であることを現し、消費者の商品選択の一助にするものです。

一般消費者向け商品に公正マークを付す場合は、以下を遵守してください。

- ① 公正マークのサイズは最低10ミリメートル四方と定め、場合によつてはそれ以上の大きさも認められます。
- ② 色は特定しませんが、容器包装全体の色柄などを参照して、見やすい色にしてください。
- ③ 添付場所は特に定めていません。
- ④ ネガ又はポジ反転は随意です。

公正マークの下段空白部に、自社名のほかブランド名を表示することはできますが、括弧書きにするなど企業名と混同されないよう配慮をお願いします。非会員から委託を受けた製品に公正マークを付す場合は、当協議会会員社名の表記が無い場合は認められません。

コーヒー公正マークは会員社であれば名刺に記載することも可能です。

- (2) 現在、某国のロースターが焙煎したコーヒーを、煎り豆の状態で輸入し、その豆を国内で粉碎し、ドリップバッグに加工する、という商品を開発中です。（流通工程等は省略）

包材デザイン上でもこのスキームについて文章で記載しており、添付の

「参考デザイン.pdf」（省略）のように「〇〇国の国旗や地形図を包材デザインに使用する」、「現地のお店の写真を使用する」ことは表示上の問題がありますか？ ※現地ロースターの使用許可はとっております。

⇒ 御社の販売する容器包装にコーヒーを焙煎した国の国旗を付することは不正競争防止法（工業所有権の保護に関するパリ条約第6条の3）に触れる恐れがあるので、記載しないことお勧めします。（参考1及び2：省略）

ただし、御社の容器包装のデザインを見ますと、国旗は小さく焙煎事業者の名前が大きいこと、コーヒー豆は間違いなく〇〇国で焙煎されていること、コーヒ一生豆生産国名も記載されていること、〇〇国の焙煎事業者の理解を得ていること、商標としての使用でないことなどから、国旗をデザインの構成要素とみれば記載も可能といえます。（容器包装のデザイン会社に商標的要素のないことを確認してください。）

(3) 消費者であるが、〇〇企業の「贅沢ブレンドコーヒー」を購入した。生豆生産国名は「ベトナム、ブラジル、他」とあり、〇〇企業のお客様相談室に電話して、「他」とあるが、どこの国のコーヒーかを聞いたところ、担当は「企業秘密で答えられない」と言った。「他」を企業秘密というのはおかしいのではないか。コーヒー公取協から当該企業に「企業秘密」とする根拠を聞いて欲しい。後ほど、再度電話する。

⇒ 原料原産地表示について、コーヒー公取協は規約制定の由来に鑑み、原料生産国（生豆生産国名）の記載が原則で、3か国以上のコーヒ一生産国がある場合は、食品表示基準第3条第2項に従い上位2か国を記載し、残りについて「他」又は「その他」と記載してよいとしている。貴兄が問合せた〇〇企業が何故「企業秘密」とされたのかは判断できない。

コーヒー公取協は会員社には生豆生産国名はホームページやQRコードの利用により告知することを懇意している。

2. コーヒーを巡るいろんな状況

2026年2月に入り、昨年8月上旬以来の1ポンド当たり200ドル台を付けるようになった。ブラジルの豊作予想やニューヨーク取引所認証在庫の回復期待などによるものであろう。とはいえた200ドル台後半の水準は高いと言わざるを得ないが。コーヒーの国際価格は高根水準が暫く続くのかもしれない。

国際コーヒー機関の最新の統計では一人当たり年間消費量は、EU が 2023 年 5.1 kg→24 年 5.6 kg、米国同 4.2 kg→4.5 kg、日本同 3.2 kg→3.2 kg となっている。主要生産国を見るとブラジル 2023 年 6.53 kg→24 年 6.56 kg、コロンビア同 2.51 kg→2.57 kg、ベトナム同 2.65 kg→2.91 kg と堅調な伸びを示している。日本以外の主要消費国、主要コーヒーランドは共に需要が堅調ということである。日本のコーヒー消費停滞の背景は値上がりが消費を抑制しているということだろう。よく言われる勤労者世帯の実質賃金の低下の影響かもしれない。ただ、日本の 2025 年の輸入価格（CIF ベース）は対前年比 4.9 %アップであり、供給サイドではコスト上昇分を転嫁しないと安定供給できないという事情があろう。

米国大統領がブラジルやコロンビアに高関税を課すとしてコーヒーランドより消費国側で騒ぎになったが、結局、米国市民の大好きな嗜好品コーヒーということで高関税の適用とはならなかった。TACO 大統領の本領発揮であるが、世界の指導者とも位置付けられる地位の方としてはどうかと思う。米国の歴代大統領をみるとトランプ氏ほどではないが似たような大統領は時々出ている。

CFT 子は終活の一環で、今、マーク・トゥエイン「ノータリン・ウィルソン」を読んでいるが、その中に「名誉のための決闘」があるが、米国の歴史では米国副大統領アーロン・バーとアレクサンダー・ハミルトン（10 ドル紙幣の人物：初代財務長官）が 1804 年に決闘をして後者が亡くなっている。日本の江戸時代であるが大老と勘定奉行が決闘したようなものである。奴隸廃止で南北戦争を戦ったリンカーン大統領暗殺後の後任のジョンソン大統領（暗殺時は副大統領）は奴隸制廃止に抵抗し議会との対決に終始した。選挙で選出する人には変な人も選ばれるのが民主主義ということであろう。

先日、務台理作先生の「現代のヒューマニズム（岩波新書）」を読んで処分したが、読んだのが 1966 年で 60 年ぶりの読み返しであった。学生の頃であるが、本に数か所線を引いているところがあったが、現在の自分には全く違和感のある個所で、人は年月を経ると考え方が大きく変わるものと実感した。先生はこの本で、「独占資本制国家はいまに国際連合さえ手にあまる不愉快なものと感じるのでないでしょうか。」としているが、今のトランプ大統領のことではないかと思い、驚きました。読書は良いですね。

（2026 年 2 月 19 日記）